

シノドスへの歩み みことばと共に 四旬節第三主日C年

小西広志

2022年3月20日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は、2022年3月20日、四旬節第三主日です。主日のミサの三つの朗読箇所をシノドスの教会の観点から読んで、味わってまいりましょう。

わたしはある。わたしはあるという者だ

今日の第一朗読は『出エジプト記』第三章からです。8節で「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」とあります。人々の叫びを聞いて降って来た神さまは、朗読箇所では省かれていますが、「今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」（10節）と、モーセに使命を与えます。そして、「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える」（12節）とモーセと共にあることを約束します。

さて、モーセは神さまから与えられた使命は受け入れます（13節参照）。しかし、心配がありました。人々を導く際に神さまのことをどう伝えたらよいかということです。「彼らに何と答えるべきでしょうか」（13節）はモーセの心もちを表しています。それで神さまは答えました。「わたしはある。わたしはあるという者だ」（14節）ここをフランシスコ会訳で読んで見ると「わたしは『ある』ものである」となっています。訳の違いはともかくとして、神さまはご自分の本質を明らかにしたのです。「わたしはある。わたしはあるという者だ」を直訳すると「わたしは、わたしがあるであろうところの者であろうだろう」になるそうです。なにか、難しいですが、つまり、神さまは誰からも規定されず、自分がいたい有り様であるということでしょうか。だから、モーセと共にいてくださるのですし、人間と共にいてくださるのです。

前例として起こったのです

第二朗読は『コリントの信徒の第一の手紙』からです。今日の朗読箇所では省かれていますが、偶像礼拝者となってはならない（7節参照）、姦淫してはならない（8節参照）、試みてはならない（9節参照）と具体的な注意があげられます。そして不平を言ってはならない（10節参照）と注意が促されます。すべて出エジプ

トの際の先祖たちの態度です。これらは悪い前例なのです。特に洗礼の秘跡に与り、「立っている」（12 節）と思ひこんでいる者は「つぶやいては」（10 節 フランシスコ会訳）ならないのです。なぜなら、「倒れないように」気を使わなければ、「荒れ野で滅ぼされて」（5 節）、簡単に倒れてしまうからです。

決してそうではない

今日の福音朗読は二つのお話から成り立っています。一つはエルサレムで最近起こった事件、事故をめぐるイエスさまの教えです。もう一つは実をつけないいちじくのとえです。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない」（2-3 節）の「決してそうではない」に注目しましょう。5 節にも同じ表現があります。誰かが災難にあつたら、それは罪の結果だと当時の人々は考えていました。

しかし、イエスさまがおっしゃりたいのは、罪というものは不幸な出来事に遭遇して初めて自覚するようなものではなく、人間のこころのうちに根深くある事実、現実なのだということでしょう。イエスさまは「あなたがたも悔い改めなければ」と繰り返します（3、5 節）。悔い改めるとは、イエスさまと一緒に生きていくことです。あるいはイエスさまを目の前にして、イエスさまをこの世に遣わした父なる神の愛を信じるようになることを意味します。

「今の時」は特別な時です。なぜなら神のひとり子であるイエスさまがこの世に遣わされて、人々と共に生きている時だからです。そして、イエスさまを通じて神さまの救いへの想いがハッキリとされるという特別な時です。空や地の模様を見分けられるのなら、この今の時の意味も見分けられるはずです。それができないのは、いくら罪人ではないと自負していたとしても偽善者なのです。

まとめ

「あなたがたも悔い改めなければ」（ルカ 13 章 3、5 節）とイエスさまはおっしゃいます。悔い改めるとは神さまの方へと向きを変えることです。人間が自分の力に頼って何かをしようとしているのを止めて、それから神さまの方に向きを変えて神さまと一緒に、神さまの助けを借りて生き始めることです。

人間は自分の理解や能力に頼って、この世界をとらえようとします。不幸な出来事が生じると、あの人たちは何か罪を犯したからだと考えます。しかし、自分は大丈夫とホッと胸をなで下ろします。実は不幸な出来事はその人のせいではないのです。

逆もあるでしょう。すべて神まかせで何にもしないという態度です。よく聞こえてくる「み旨のままに」という言い方は、自分の努力を放棄する生き方へとつながりかねません。

今日の福音朗読で災難に遭ったガリラヤ人たち、シロアムの塔が倒れて死んだ 18 人は、罪人だったから辛い目にあったのだという人間的な理解をイエスさまは退けます。また、せっかく一年間待ってくださいと園丁が願っているにも関わらず、実をつけるように努めないいちじくの木は切られてしまいます。

神さまは共にいてくださる神さまです。そして相手にあわせて「ありてある者」です。神さまの救いの想いは人間との協力、人間との協働を通じて実現するのです。

教会には神さまの救いのご意思が託されています。教会は「共にある」神さまと一緒に歩み、神さまに協力し、神さまと共に働きます。シノドス的な教会とは、教会に託された神さまの想いを、ご意思を常に新たに受け取り、実行しようとする教会です。ですから、「時のしるし」を読みとるよい目とよい耳が教会には必要になります。なぜなら、神さまの想いのご意思はこの世に隠されているからです。人々の日常の生活の中に隠されているからです。時の移ろいの中にあるからです。自分の力と権能に頼るのではなく「時のしるし」を読みとる教会であり続けたいものです。

毎日のようにウクライナの戦況が伝えられて、こころが傷みます。テレビのコメンテーターは、すべて人や政治のせいにします。また、ある人たちは「神さま平和をください」と願います。どちらの態度も間違っていない。しかし、キリスト者に求められる態度は、平和をもたらしてくださる神さまと一緒に協力して、神さまと力をあわせてウクライナとロシアの人々に尽くすことです。それは、祈りからはじまります。

それでは、また来週。